

祭文

令和元年度大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭を挙げるに当たり、戦没者慰霊諸団体を代表して、謹んで全戦没者の御霊に慰霊の言葉を捧げます。

過ぐる大東亜戦争においては、多くの皆様が、祖国と同胞の安寧を願い、アジアの解放と繁栄を実現すべく、北は酷寒不毛、南は酷暑瘴癘の地に赴き、勇敢に闘って二百二十数万余柱に及ぶ皆様が散華されました。

家族を故郷に残し、散つて逝かれた皆様方のご無念と、ご遺族の悲痛に思いを致す時、今なお方感胸に迫るものがあります。

今日の我が国、国民が享受する豊かで平和な生活と、アジア諸民族の独立と発展は、皆様方の献身が礎石となつて築かれたものであることを忘れることはできません。

しかしながら、平和と繁栄が続いた七十有余年という長い歳月が経過し、皆様とともに戦い、我々を導いてくださった戦友の方々も徐々に数少なくなる中で戦没者に対する国民の慰霊と感謝の思い、先人が遺された我が国古来の伝統的美徳が風化しつつあることが憂慮されます。

私ども大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会は、戦没者慰霊諸団体と相携えて、

戦没者慰霊事業の永続と、それを通じての国民道義の作興に寄与することを目的としております。

新たな御代を迎えた今こそ、大東亜戦争の国難に敢然と立ち向かわれた皆様方の勇氣と献身を、そして生き残った戦友が皆様のご加護を得て懸命に成し遂げた戦後の奇跡の復興を思い起こし、正しい歴史と崇高な精神の継承をはかり先人から託されたこの美しい国の平和と繁栄に邁進すべく覚悟を新たにしております。

また、百十数万余柱に及ぶ未だ帰還を果たされていない戦没者のご遺骨の帰還についても、遺骨収集事業に携わる体制の一員として、お一人でも多くの方々に故国にお帰りのただけよう全手を尽くして参ります。

令和の御代、最初の合同慰霊祭に際し、戦没者慰霊諸団体の各位と共に、霊前に額つき、在天の御霊の安らかならんことをお祈り申し上げますとともに、どうか私どもになお一層のご加護とお導きを賜りますことを冀つて慰霊の言葉と致します。

令和元年七月六日
戦没者慰霊諸団体を代表して
公益財団法人
大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

会長 島村 宜伸

式典

式典は、正午に開始された。トランプ氏の伴奏（堀田和夫、牟田春雄両氏）により全員起立して国歌を斉唱した後、神職による修祓の儀、献饌の儀、祝詞奏上と神儀が進められた。

祝詞においては、慰霊諸団体合同主催の趣旨に鑑み、夫々の団体の戦没者への思いを込めて、協議会参加45団体の団体名が奏上された。

次いで、島村宜伸協議会会長が協議会参加慰霊諸団体を代表して上掲の祭文を奏上したが、その中で特に平成の御代に国民に率先して戦没者に追悼と感謝の誠を捧げてこられた上皇・上皇后両陛下の御退位に思いを致し、我々一同これまでも増して戦没者慰霊活動の作興に邁進すべき覚悟の程が披歴された。

加えて、先人の残された我が国の伝統的美徳に反し、人倫に悖る行為の多発や世界に誇る基幹産業においてすら不祥事が多発する現下の風潮を憂え、戦没者慰霊活動を通じ国民道義の作興に寄与せんとする協議会設立の趣旨を改めて思い起こし、覚悟も新たに、この国の建て直しに邁進することを戦没者の御霊にお誓い申し上げ、在天の御霊の一層のご加護を冀つた。

なお、本慰霊祭に際し、靖國神社での慰霊祭には出向けないが、在宅のまま靖國神社に向かい参拝したいとの申し出と共に玉串料をお寄せいただいた「在宅参拝者」が今年も国内外合わせ66名を数えた。

これらの方々は、祭文と共に神前に奉納する「参拝者名簿」に記載し、参列者と在宅参拝者を合わせて225名の名簿を奉納させていただいた。



式典に臨む慰霊諸団体代表



トランペット演奏(堀田和夫・牟田春雄両氏)



世田谷男声カルテッド「ガバーガバ」の皆様

次いで奉納演奏に移り、昨年引き続き参加いただいた世田谷男声カルテッド「ガバーガバ」の皆様(企画指導大穂孝子氏)による「芭蕉布」、「遙かな友に」の2曲が奉唱された。美しい

男声4重唱のハーモニーが御霊に届けられた。
奉納演奏の後段は、参拝者一同で雄々しく戦場に散って逝かれた戦没者に思いを馳せつつ、「同期の桜」、「海ゆかば」をトランペットの伴奏で斉唱、大合唱の歌声は神苑にこえました。
最後に、参列者一同は「本殿に昇殿参拝、慰霊団体代表の玉串奉奠に合わせ参拝した後、「国の鎮め」のトランペット演奏の中、しばしの黙とうで戦没者慰霊の誠を捧げた。

直会

式典を終えて、参拝者一同靖國會館に移動し、2階の会場「九段・玉垣・田安の間」において1330からご来賓、参加各団体代表、賛助会員、JY



島村宜伸会長挨拶

MA学生等103名が参加して直会が執り行われた。

直会は、当協議会伊藤専務理事の司会により進められた。

最初に、当協議会を代表して島村宜伸会長が挨拶に立ち、本日の式典が滞りなく厳粛かつ盛会裡に終了できたと、斎行に当たり参加各団体から絶大なご支援・ご協力をいただいたことに対し感謝の意を表されるとともに、今後とも戦没者慰霊事業の永続のためご支援賜りたい旨の挨拶が述べられた。

次いでご来賓の靖國神社村田信昌権宮司から靖國神社崇敬奉賛に各団体から寄せられている協力・支援に感謝の意が表されるとともに「靖國神社創建150周年記念事業」の進捗状況、特に外苑整備の一環として桜の陶板が竣

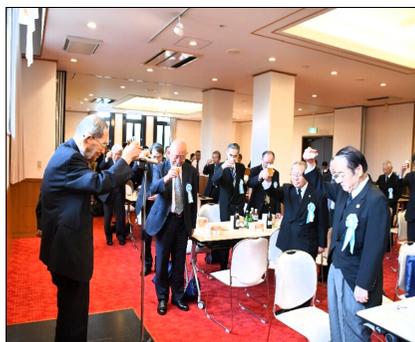


村田信昌靖國神社権宮司挨拶

工したこと、間も無く始まる「みたま祭」においてしばらく中断していた夜店が復活すること等が紹介された。

続いて、本日参列の協議会参加慰霊団体代表の紹介と山谷えり子、佐藤正久、宇都隆史、水落敏栄参議院議員から寄せられた慰霊電報の披露があった後、本日参列の慰霊諸団体を代表して東部ニューギニア戦友・遺族会会長堀江正夫氏が104歳とは思えぬ矍鑠たるお姿で登壇され、ご挨拶を兼ねて献杯の御発声をされた。

ご挨拶の中で、14年前に当協議会を立ち上げた初代会長瀬島龍三氏の思いに触れ、今日後を継いでいる私共一同が厳粛かつ盛大に慰霊祭を行ってくださることを大変喜んでおられる事であるうとの所感を述べられた。



堀江正夫東部ニューギニア戦友・遺族会会長による献杯



寺島泰三英霊にこたえる会
会長による献杯



和やかな懇談・会食

その後、和やかな雰囲気の下、懇談会食は1時間余に及び、戦没者慰霊にかける思いが同じ者同士、戦没者への思い、お互いの慰霊活動や遺骨収集活

くられた。御挨拶の中で、かつて昭和になったとき「明治は遠くなりけり」と言われたように、平成から令和に御代が移った途端に昭和が遠くなったような気になり、戦没者への思いが急速に希薄化する可能性があるのでは、そうならないように頑張りましょうと述べられたのが印象的であった。戦後74年が経過し、慰霊祭参加者も急速に世代交代が進みつつある。この世代交代を円滑に実施し、戦没者慰霊・顕彰事業を継承発展させることこそ戦没者の勇気と献身に応える道だと確信した。(圓藤春喜記)

動等を語らい意義深い懇談の場を過ごした。

最後は、堀田和夫、牟田春雄両氏のトランペット演奏に合わせ、戦没者を偲びつつ全員で「海ゆかば」を斉唱した後、英霊にこたえる会会長寺島泰三氏のご挨拶と御発声による献杯で会は締めく

理事長交代のご連絡

この度、当協議会設立準備に携わり、平成24年からは当協議会の理事長として勤務され、戦没者の慰霊顕彰に尽力されてきた柚木文夫理事長が退任され、山下輝男氏が新理事長に就任されたので紹介します。なお柚木氏は当協議会の評議員として留まり、引き続き執行部にアドバイザーとしていただけるようになっていきます。

退任ご挨拶

謹啓 新緑の候 益々ご清栄のこととお慶び申し上げます

私儀

この度 当協議会理事会の承認を得て 公益財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会理事長を退任いたしました 当協議会の設立準備に携わるとともに 平成二十四年三月十二日からは理事長として務めて参りましたが この間公私にわたり格別のご指導ご厚情を賜り誠に有難く厚く御礼申し上げます

令和元年五月吉日

柚木 文夫

謹言

就任ご挨拶

謹啓 新緑の候 益々ご清栄のこととお慶び申し上げます

私儀

この度 当協議会理事会において代表理事に選任され 公益財団法人大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会理事長に就任いたしました 新参未熟の私にとつては 当理事長の任は身に余る重責ではありますが 心新たに専心職務に精励いたす所存でございますので 何とぞ前任理事長 柚木文夫氏同様 格別のご指導ご高配を賜りますようお願い申し上げます

令和元年五月吉日

山下 輝男

謹言

北部ソロモンの戦い

その3

岩田 司朗

○前号までの要約

ガダルカナル島 次いでニュージョージア島(中部ソロモン)に進攻した連合軍は、昭和18年11月11日、ブーゲンビル島タロキナ地区に上陸、日本軍守備隊は任地で玉砕した。

同島の南部・西部の防衛を担当する第6師団長から、「上陸した米軍の撃攘」を命ぜられた歩兵第23連隊長は、11月8日から10日の間、米軍橋頭堡に対する攻撃を敢行したが、迫撃砲の集中射撃による損耗が大きく、弾薬の補給も途絶え、衆寡敵せず敗退した。

(第1次タロキナ作戦)

昭和19年を迎え、南太平洋の戦局は急迫を帯びた。即ち前年末連合軍はニューブリテン島ツルブ地区に上陸、1月2日にはダンピ岬付近に上陸、同地区要域の保持を企図する第20師団の背後連絡線を遮断した。

3月8日、「タロキナ地区の第2、第3飛行場を攻略し敵を随所に捕捉撃滅する」方針のもと、歩兵各1個連隊を基幹とする3個部隊をもって三方向から攻撃が開始され、近接肉弾戦によ

る一進一退の戦闘が展開された。

日本軍は、夜陰に乗じて肉薄攻撃を反復したが、米軍の猛烈な砲迫射撃と歩兵、対戦車、戦車の歩戦チームに抗することができず、主攻正面の2個大隊は24日頃までに玉砕した。(第2次タロキナ作戦)

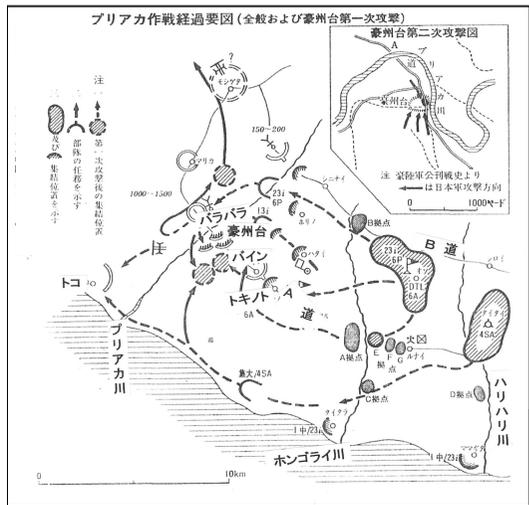
第17軍は、方面軍命令によって、タロキナ橋頭堡に対する攻撃を中止し、次期作戦への新態勢に移行した。

4月から11月頃まで連合軍に顕著な行動は認められなかったが、11月下旬には地上作戦の担当が米軍から豪第3師団に指揮転移され、その活動は積極的となった。豪側の真面目な攻勢企図に対し、西地区警備隊長は決戦を敢行したが、栄養失調とマラリアに侵された部隊では如何ともしがたく、連合軍のタロキナ上陸以来、常に第一線に対する補給兵站基地として活動したモシゲタも、20年2月末、豪軍の攻勢の前に遂に放棄され、日本軍はブリアカ川以南に撤退した。

(3) 第6師団のブリアカ作戦

ア ブリアカ作戦の発想

第6師団長神田中将は、かねてから連合軍に対する反撃の機会をうかがっていたが、モシゲタ付近を占領した豪軍が、その態勢を整理することなく、ブリアカ河畔に向って進出中なのを知



区に敵を誘致させ、攻撃の重点をA道北側地区に保持して、敵を海岸に圧迫するように攻撃する。

b 攻撃開始の時期は、敵が暴進してその後方が追従し得ないと思われる3月下旬以降なるべく早い時期とする。

c 攻撃は不意急襲に徹底し、敵軍後方に突破潜入して各方面の敵を二分撃滅する。

d 使用兵力は、エレベント地区を除く以西各地区警備隊の行動可能な兵力の全力とし、兵力量においても優勢を期する。攻撃実行に適するよう重装備を排し、自動火器を増加携行する。

この作戦計画の示達は予定通り行われ、各部隊は3月28日、それぞれ行動を開始した。

イ ブリアカ作戦計画の概要

(ア) 方針

エレベント地区以西にある師団隷下及び指揮下兵力の全力を挙げてブリアカ河畔に作戦し、短切果敢な攻撃を敢行し、敵の進攻意志を挫折させ、なし得れば西地区警備地域内から敵を駆逐する。

(イ) 要領

a 西地区警備隊にA道に沿う地

部隊運用の基本構想は、攻撃開始日を4月1日とし、歩兵第13連隊(600名)が豪州台の西方でブリアカ川を渡河して豪州台を西方から攻撃する。歩兵第23連隊(700名)は歩兵第13連隊の外側を更に大きく敵の後方に回り込み、バラバラからトコ方向に突進する。野砲兵第6連隊(1300名)はA道に沿って西進し、豪州台を南側から攻撃するというものであった。

ウ バインの戦闘

プリアカ川南岸の豪州台に進出した豪軍は、トコに上陸した豪第25大隊で、

3月4日、プリアカ川を越えて、A道正面に防衛線を敷いた。11日大隊主力が南岸を前進し12日その先頭がヒルヒルに到着し、主力は豪州台に、一部を南方（バイン付近）に位置させた。

これに対し、砲を捨てた野砲兵第6連隊の集成大隊が、豪軍先頭中隊の陣地（トキノト付近）を迂回して本道上の後方中隊に突っ掛かって行つて、見事な勝利を収めた。この戦闘における豪側の遺棄死体は約300を数えたが、野砲兵第6連隊は、5名の中隊長のうち、1名戦死、2名の負傷を含み戦死傷112名と記録されている。

エ 豪州台の攻撃

(ア) 歩兵第23連隊の行動

最右翼方面から行動を起こした歩兵第23連隊は、3月29日、プリアカ川右岸のバラバラを攻撃して、これを突破し、じ後海岸のトコ方向に進撃したが、陣前の鉄条網に遭遇し、更には戦車の来襲が予見されたため、戦闘を中止し戦闘開始前の集結地に再集結した。

(イ) 歩兵第13連隊の行動

歩兵第13連隊、プリアカ川右岸から同川左岸の渡河点陣地（豪州台）を急襲すべく、第一線2コ大隊並列で4月

1日午前3時、隠密裡に渡河を始めた。渡渉半ばで豪軍が発見し射撃を開始した。

第一線は強襲に転じ、陣地に突入り、その後端に出た。天明とともに豪軍は迫撃砲の射弾を日本軍に集中してきた。多数の死傷者がかえ、弾丸を使い尽くしていた連隊は、敵の迫撃砲射撃地帯を避け、態勢を整理した。

(ウ) 豪州台第2次攻撃

4月2日までの諸情報を総合して、既述の戦況の概要を知った師団長は、作戦計画の一部を変更し、敵の意表に出で攻撃を開始し、じ後対応のいとまを与えないように特に火力を發揮しつつ猛烈果敢に突入する野砲兵連隊のバイン攻撃要領を採用することとした。

豪州台第2次攻撃は、第一線に歩兵第23連隊（約500名）、歩兵第13連隊（約400名）を並列、師団予備は野砲兵第6連隊第3大隊とし、攻撃時機は4月5日と予定し、師団戦闘指令所を同月2日、バイン南西地区に推進した。

4月5日黎明から乾坤一擲の攻撃を開始、両連隊は火力をもって敵を制圧し、難なく敵の第一線陣地を奪取したが、第2線陣地前の鉄条網、戦車による敵の逆襲に対抗策なく、所期の成果を上げることは叶わなかった。

(エ) 師団長の作戦指導

第6師団は、プリアカ作戦により豪側に与えた損害は相当大きなものがあるが、こちら側の損耗人員も1,000名に近く、特に大隊長以上の幹部の戦死と自動火器の損廃亡失が意外に大きかったため、一時敵の前進を阻止したが、作戦所期の目的は達成していないと判断した。そしてそのような戦力の低下の中身として、日本側に対戦車資材と対鉄条網資材がないということとを、敵側に知らせてしまったことは、大きなマイナスであると考えた。

作戦の結果から、豪側が今次作戦後の整備を完了すれば、なるべく速やかに主力をもってA道に沿う地区から攻撃を開始するであろうことは確実であった。

師団長は、軍主力のエレベータ周辺の陣地が完成するまで、敵をなるべく遠く西方に阻止するという基本的な考え方に基づき、ホンゴライ川とハリハリ川の間接地帯に数個の拠点を堅固に編成、なるべく長く敵の前進を阻止する方針を採用し所要の部隊を配置した。

13 北部ブーゲンビルの防衛

タロキナ峠―バカナ山―長沼を連ねる、概ね島の中央部を東西に分断する第6師団との境界線の北部地域には、歩兵第81連隊を基幹とする独立混成第

38旅団が、バカナ山北側山系、ヌマヌマ地区、タリナ地区等に部隊を配置し、同地区の警備に任じていた。

これらの地域においては、昭和19年10月頃から、約10か月にわたり、日豪両軍の交戦が記録されているが、いずれも山岳地帯の小部隊の独立戦闘であり、かつこれらの部隊が玉砕に近い戦闘をしていること、また、当時の地図情報に乏しく、交戦した日豪両軍の地点の呼び方に全く共通性がなく、戦闘の詳細は不明確である。

このため、日本側の唯一の公式資料である「第17軍作戦記録」、及び「豪陸軍公刊戦史」の記録に基づき、この地区における戦闘の概要をまとめて記述する。

(1) タロキナ峠周辺の戦闘

タロキナ峠からブーゲンビル島東岸のヌマヌマに至る経路は、「ヌマヌマ道」と称せられており、本道のタロキナ峠への登り口付近で11月上旬から戦闘が開始された。同地区の守備部隊である歩兵第81連隊を基幹とする部隊が、当初は米軍、11月下旬からは豪軍と交戦した。

地形は、尾根から尾根へ馬の背のように切り立った稜線上を徒歩道が通っている山地帯で、日本軍は反射面陣地を構築して徹底抗戦を図り、豪軍に何

度も攻撃再興を強要したが、12月末に豪陸軍公刊戦史には、約10kmの間に日本兵の戦死者約80名が記録されている。

豪陸軍公刊戦史には、約10kmの間に日本兵の戦死者約80名が記録されている。

(2) タロキナ峠以北の持久戦

タロキナ峠以北には、独立混成第38旅団が、ヌマヌマ防衛を目的として、ヌマヌマ道上に2つの拠点を、北方からの迂回路上の拠点、ヌマヌマ北方の海岸陣地、南西方の阻止陣地に部隊を配置、旅団司令部はヌマヌマにあった。

この地域における日豪両軍の最初の衝突は、昭和20年1月7日、峠から1kmほど離れた場所で行われた。各拠点は、20名〜30名規模の陣地であり、豪軍は、砲撃とともに、断続的に攻撃を加え、各所で激戦が展開され、7月18日、陣地全体が豪軍の手に帰した。

(3) スン高地の戦闘

ブーゲンビル島北部の要衝、タリナ、ブカ地区に対する豪軍の攻勢は、昭和20年1月に入ってから開始され、海岸道沿いに北進した豪軍と日本側警備部隊との激戦が、1月17日〜18日の間、スン高地南側地域で展開された。

スン高地では、歩兵第81連隊第10中隊、旅団砲兵第2中隊を基幹とする警備部隊が、優勢な砲兵支援の下に、迂回、側背攻撃を反復する豪軍に対し、

頑強に抵抗したが、遂に2月9日、同高地は陥落した。

この間の戦闘において、豪陸軍公刊戦史では日本兵66名戦死と記録されており、また、第17軍作戦記録には、「わが損害甚大にして、戦闘開始以来の死傷者各隊平均約70%に達せり」と記述されている。

(4) ソラケン半島の戦闘

新たに交代した豪軍は、日本軍と小戦を交えながら、2月下旬じりじりと北上した。日本側は密林と地形を利用して、随所で遅滞戦闘を行った。

3月12日夜、ソラケン半島西海岸に海上から上陸した豪軍部隊は、ソラケン半島を南北に分かれて突進したが、上陸部隊に対する日本軍の反撃は、いづれも散發的であつたらしく、16日には日本軍は後退した。

半島基部の植林の南端に所在する小さい丘の周辺では、両軍の斥候がしばしば衝突したが、それも5月20日頃にはなくなつた。

14 エレバンタ決戦準備

昭和20年4月1日、百武中将と交代して第17軍司令官の職についた神田中将は、ブーゲンビル島全般の情勢を判断して、エレバンタ地区に軍最後の決戦を指導することとし、その準備を急速に推進することとした。



ルタイ、トーレイ湾を連ねる線内の地区に主陣地帯を構築し、同地帯内に敵を迎撃してその攻撃を破砕する。

主陣地帯は、主要な道路に沿う地区に重点を保持し、縦深横広に各独立の堅固な拠点を構築する。戦闘に際しては、各拠点を根拠として短切果敢な攻撃を反復する。ウ 状況により、軍主力をもって主陣地帯の前

エレバンタ地区の決戦準備は、かねてからその整備に努めてはいたが、第6師団正面の戦況からみて、その完整に先だつて決戦を惹起する懸念が強くなつた。

そこで、海軍との協定を急ぎ補綴した上、4月下旬には、次のような17軍の決戦要綱が策定された。

(1) 方針

軍は全員玉砕を期し、敵の攻勢をエレバンタ地区に迎撃するため、8月末日迄に堅固な主陣地帯を構築し、これを根拠として短切果敢な攻撃を反復し、飽くまで一人十殺の成果を獲得する。

(2) 要領

ア 概ねブイン、ツリコイル、ツ

方で敵と決戦を求め、エレバンタ周辺の作戦準備は、6月以降著しく進捗したが、7月下旬頃までは第6師団がタイタイ付近を確保するであろうとの当初の見積もりが狂つたため、作戦準備完了の時期の繰り上げが必要となり、これにともなつて各部隊は絶大な努力が要求された。

軍は当初8月末までに完成を予定した主陣地帯を、7月上旬中に要部を完成し、同月末までには全部を概成することとした。なお、軍はこの間に決戦に備えて教育訓練の実施に努め、また、兵器弾薬の研究製作等、後方に関する諸施策を推進していた。

15 バイン、トキノトの戦闘

「ブリアカ」作戦後、戦場は平穩に推移したが、豪軍は、4月18日、攻撃を開始し迫撃砲の集中射撃により、バイン、トキノト陣地に近迫してきた。

トキノト占領部隊は、敵の進出に際し18日から19日にかけて反撃を実施したが、猛爆撃、砲兵の集中射撃、弾幕に虜接して突進する戦車に対し、そのほとんど全員が戦死し、わずかの生存者がホンゴライ河畔の陣地に後退した。

16 ホンゴライ河畔の戦闘

第6師団長は、ブリアカ作戦直後、ホンゴライ川ーハリハリ川（ホンゴライ川の東方約7kmに位置）間に拠点を堅固に編成してなるべく長く豪軍の前進を拒止する措置を講じた。

豪軍は4月25日、A道上の拠点对し、爆撃と砲撃を併用し、戦車を先頭としてその後方に徒歩兵を随伴して攻撃を開始、守備隊は、27日には敵戦車の突破を許し、拠点の側背に豪軍が進出するところとなり連合軍中に孤立する態勢になった。

A道上の各拠点は、兵力概ね1コ大隊（200名以下）、拠点間の距離は500〜1,000mで、4個の拠点が編成されていたが、豪軍の猛攻により、5月上旬にはホンゴライ川の河岸の戦闘は終焉した。

17 ミオ川反撃作戦

(1) 作戦計画

4月1日神田中将と交代し第6師団長となった秋永力中将は、前師団長の方針を継承し、当面敵の進攻路に沿って縦深に陣地を占領し逐次の抵抗を行うような作戦を指導した。

しかし連合軍側は、ブリアカ作戦終了後約10日を経た4月18日には、早くもその攻勢を再開し、砲兵及び航空の支援のもとに、戦車を伴って強力な攻撃をかけてきた。その結果、逐次わが拠点は突破され、5月下旬にはタイタイ付近に進出した。

新軍司令官神田中将は、この状況に鑑み、歩兵第45連隊等の守備隊をミオ川の線に派遣して第6師団を増強すると共に、同師団の積極的な行動を要望し、少なくともホンゴライ川東方20kmにあるミオ川以西で敵に一大反撃を加えるよう命令した。

5月下旬、タイタイ付近に進出した豪軍は、5月28日頃からハリ川左岸のわが陣地に対して本格的な攻撃を開始し、6月5日には善戦する守備隊の間隙を突破して、A道上のわが背後に深く侵入した。そして後引き続きA道を進出して、6月中旬にはミオ川西方約5kmのモビアイ川右岸に進出した。

師団は、諸情勢を検討し、「あくまでミオ川以西に健在し、敵の暴進を阻

止し、エレベータ地区における軍の決戦準備を容易にする。」旨の反撃の構想を策定した。

(2) 作戦経過の概要

ミオ川はブーゲンビル島最大の川幅を有し、水深は30cmくらいであるが、渡渉を要する川幅は100mを超える。この川を渡れば約20kmでエレベータ防衛陣地の前線チリパイ川、ラグワイの部落である。重砲を据える射程はブインの飛行場近くまで届く。

6月中旬、モビアイ河畔に進出した豪軍は、その後、モビアイ川左（東）岸に縦深に配置された日本軍各拠点对して、砲兵の集中射撃と爆撃を反復実施していたが、6月26日頃突如A、B道の中間地区を突破して、主力でシガキロ、一部でシガキロ西方約3km付近に進出した。そして、まず同地付近に拠点を構築して根拠地とし、モビアイ川左岸のわが陣地に対し、一部の正面からする攻撃と連携して背後から攻撃を開始した。

第6師団長は26日、ミオ川作戦計画に基づき指揮下各部隊に攻撃開始を命じたが、大きな成果を得ることはできなかった。

6月29日、B道方面から南下した豪軍は、8分ごとに200ヤード延伸する砲兵の弾幕射撃と戦車の支援を受け

ながら前進してきた。物質的に最低限の条件下で日本軍将兵は、悲壮な覚悟をもって必死に反攻を行った。

7月上旬からは雨がひっきりなしに降っていた。この頃のブーゲンビル島南部は、日本軍の決意に天候が味方するように連日の豪雨にたたかれていた。豪軍資料によれば、攻撃前進開始予定日の7月10日以前に雨天が続いたため、前進開始が7月24日まで延期されることとなった。17日には雨が更にひどくなり、36時間以内に8インチ（約200mm）の雨が降った。ミオ川の流速は12マイル（20km）/時の速さとなり、後方補給線上の橋は総て流出し、どの川も氾濫していた。

前線の部隊には空輸以外に補給の道はなく、道路や橋を修復するためには、数週間を要すると見積もられた。豪軍は、部隊を前進させるどころではなく、現在の位置でいかに食わせていくかということが問題になり、出発予定日は、8月末まで延期された。

18 ブーゲンビル島の終戦

(1) 第6師団の状況

終戦決定前の、日本政府とアメリカとの交渉内容を短波無線でシドニー放送から傍受した。日本政府の最後の返答があり、8月14日から全戦線の敵砲火が停止し、8月15日午後、日本降伏

を知らせる敵の飛行機が飛んできたが、これは敵の謀略だと一般は解した。

8月20日ころ、敵中深く潜入している歩兵13連隊は、今一度敵部隊の襲撃に出発したところ、突然、敵機が頭上からなにかをまいた。さては敵もいよいよ困って毒ガス散布かと、水中にもぐり込んだり、密林に走り込んだ者もいた。

その時、だれかが「勝った万歳」と叫んだ。空からまかれたのは毒ガスではなくてビラであった。そのビラには「平和協定成立する。戦闘を中止し速やかにブインにさがれ」と書いてあった。

これを見て一同は口々に万歳を叫んで喜びあった。日本軍は他の正面のどこかで決定的な勝利を収め得たと確信した。

その夜の露営地は特に朗らかであった。ところが、翌朝、超低空でわが頭上を旋回する敵機の胴体に「日本降伏」と書いてある。またも謀略かと舌打ちしたが、数日前から敵の活動が急に衰え、様子がおかしい点もある。半信半疑でひとまず連絡の取れる所まで帰ることになった。ミオ川の線に到着して「終戦の詔勅」が8月15日に下されたことを初めて知った。そして全員声をあげて泣いた。(第6師団長秋永力中将の

回想等)

(2) 降伏式

豪軍の要求により8月24日に日本側の軍使が派遣され、豪軍側から武装解除、人員の集結、兵器弾薬の処分等に関する要求が指示された。

降伏のための調印式は、9月8日、タロキナ基地で行われた。日本側からは、第17軍司令官神田正種中将、第8艦隊司令官坂倉重中中将及びそれぞれ参謀長、高級参謀が随行し、連合軍側は豪軍司令官スタン・エス・サビジ中将が代表として出席した。

まず神田中将の提案によつて両軍戦没者将兵に対し黙禱をささげたのち、両軍代表が調印した。

協定に基づき、兵器弾薬はエレベータ湾に沈め、人員はマイカに終結した。

19 ソロモン諸島における慰霊巡拝、遺骨収集

昭和40年10月に発足した全国ソロモン会により、ガダルカナル島、ブーゲンビル島をはじめとするソロモン諸島方面における慰霊巡拝、未送還遺骨の調査・収集、現地の人々との友好親善等の事業、靖国神社・護国神社・寺院等での慰霊祭並びに慰霊法要が執り行われている。

ブイン、タロキナには、全国

ソロモン会によつて建立された慰霊碑がある。

ブーゲンビル島における遺骨収集は、昭和43年7月、全国ソロモン会有志が主体となって、「ブーゲンビル島遺骨収集全国派遣団」が結成され、2、617柱のご遺骨が収容された。その後も政府派遣等の遺骨収集で、平成29年6月時点で、9、939柱のご遺骨が収容されているが、同島における戦没者33、500名の1/3にも満たない。

ブーゲンビル島では、島の中央にあるバングナ銅山の利権と環境汚染問題を巡り、1988年にブーゲンビル革命軍が武装蜂起し、以来、約30年間、治安情勢が悪く、政府が関与する遺骨収集・慰霊巡拝が実施されなかった。



全国ソロモン会建立慰霊碑

2016年になってようやく治安も回復し、全国ソロモン会、遺族会、JYMA日本青年遺骨収集団からの要員で編成された派遣団により、遺骨情報収集、遺骨収集事業が実施されるようになった。

全国ソロモン会の住田陸快副会長は、同会会報誌「ソロモン」第119号(平成29年5月15日)に掲載された海外未送還遺骨情報収集事業派遣団概要報告の中で、「今一度国内外の戦史・戦記などの資料を調査することによつて、戦闘地や駐屯地などを明らかにし、戦没者の分布や集団埋葬地を特定することです。・・・(中略)・・・国の事業としての『特定箇所における遺骨収容に特化した遺骨収集事業』が必要との認識を強く持った。これまでの『海外未送還遺骨情報収集事業』による遺骨収容は、本来の情報収集活動に伴つて地元民が収骨したものを派遣団が受領する、いわば受動的な収容形式であるのに対し、日本政府が指定法人をして積極的に特定箇所へ派遣して能動的に収容する形式といえる」と述べられているように、厚生労働省、外務省、防衛省等国の関係機関と、民間団体が緊密な連携のもとに、国の責務を果たすべくより一層の事業推進が望まれる。(完)

平成30年度ミャンマー戦没者遺骨収集派遣に参加して

國澤 輝生

一 はじめに

私は平成31年3月1日から同年3月14日まで、一般社団法人日本戦没者遺骨収集推進協会主催の平成30年度ミャンマー戦没者遺骨収集派遣に参加しました。

この度、本誌に寄稿する機会を得ましたので、大東亜戦争における激戦地ミャンマー（旧ビルマ）で戦没された方々の遺骨収集の現況について、私が活動したシャン州ペコン地区ブラバロオ村での遺骨収集を主体にその一端を紹介したいと思います。

二 派遣計画の概要

1 派遣団の構成

日本戦没者遺骨収集推進協会4名、日本遺族会2名、JYMA日本青年遺骨収集団2名、大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会1名、厚生労働省職員（指導監督、遺骨鑑定人）2名の計11名で編成されました。

その他に同行者として現地通訳及び現地遺骨鑑定人各2名、ミャンマー日本国大使館職員1名という陣容でした。

2 表敬・協議先

- (1) 在ミャンマー日本国大使館
- (2) ミャンマー連邦共和国宗教・文化省
- (3) マンダレー地域域マンダレー地区区政府
- (4) マンダレー地域域メイッティラ地区区政府
- (5) シャン州ペコン地区区政府
- (6) ミャンマー連邦共和国宗教・文化省ヤンゴン事務所
- (7) ヤンゴン税務局

3 派遣団の任務

- (1) 遺骨収集
 - 2班に分派し、以下の地域にて遺骨収集を行う。
 - 1班：シャン州ペコン地区
 - (※私が所属し活動した班)
 - 2班：マンダレー地域域マンダレー地区、メイッティラ
 - 平成30年度現地調査で収容した遺骨を確認する。
 - 現地で得られた遺骨情報について収集・確認をする。
 - 遺骨の洗骨を行う。
 - 手順書に基づきDNA鑑定のための検体採取を行う。
 - 収集した遺骨について遺骨整理票を作成する。
 - 収集した遺留品について遺留品調

書を作成する。

- (2) 追悼行事
 - 3月8日（金）、ペコン地区及びメイッティラにおいて焼骨式を行う。
 - 3月12日（火）、ヤンゴン市内「ビルマ平和祈念碑」前にて合同追悼式を執り行う。

※天候及び現地習慣等により変更する場合があります。

(3) 送還及び引渡式

3月14日（木）、厚生労働省主催の千鳥ヶ淵戦没者墓苑で挙行される遺骨引渡式において、送還した遺骨を厚生労働省へ引渡す。

三 派遣団の活動実績

- 3月1日 結団式及び説明会
- 3月2日 成田国際空港発
- 1630 ヤンゴン国際空港着
- 3月3日 ヤンゴン市内
- 1030 (遺骨収集機材購入等)
- 1630 ヤンゴン空港発
- 1725 ネピドー空港到着



ミャンマー（ブラバロオ村）位置図

1000 3月5日

ペコン地区行政政府表敬及び打合せ



ミャンマー連邦共和国宗教・文化省 訪問及び打合せ

1110

移動(途中国防博物館見学)
・宗教・文化省との打合せ
・現地村連絡先電話番号
・メンバーの紹介
・2個班の活動概要説明
・手塚厚労省代表挨拶
・鈴木大使館書記官挨拶
・表敬訪問及び打合せ

1030 3月4日

ミャンマー宗教・文科省

1000 3月7日

ブラバロオ村到着

1730
ホテル到着 前回調査派遣者に衛星通信で状況を再確認、今後の対応を検討

なお、関係部署の尽力により、焼骨をせず持ち出す許可の調整が概ね完了

M(ミャンマー人遺骨) 01は問題なし
M02は上腕骨群30本中の1本が該当すると思われるが、明瞭にわかる状況になかった

遺骨収集作業・遺骨鑑定開始
ミャンマー人遺骨の分別状況を主体に確認

1000 0940 3月6日

ブラバロオ村到着

1720 1600

ペコン到着 収納箱・鍵購入

ブラバロオ村離脱

明日以降の作業手順確認

納骨状況の確認

1430 1415 1045
ブラバロオ村長等への挨拶

記念撮影

1750 1625 1015 1010

ペコン着 現地追悼行事用品購入

ブラバロオ村出発

ミャンマー人遺骨との分別作業

ブラバロオ村到着

報告・持出許可証発行依頼
檜崎先生からの連絡への対応

0906 0700 3月8日

生との連絡・調整

マーシャル諸島で活動中の檜崎先生との連絡・調整

ペコン地区行政政府(長)への中間報告・持出許可証発行依頼



納骨場所から遺骨を搬出

1620 1005

ブラバロオ村出発

遺骨鑑定確認作業

0915 0745 3月10日

ロイコー空港発

ペコン出発(車)



ブラバロオ村現地追悼式の模様
高谷1班長(左)とペコン地区行政政府長(右)

1920 1700 1657

地区行政政府長等招待夕食会

団装備品の分別・整理

遺骨持出許可証受領

ブラバロオ村住民にお礼(菓子等プレゼント)

遺骨収容

ミャンマー人遺骨安置及び日本人

昼食(ブラバロオ村村長宅)

ブラバロオ村現地追悼式

3月9日

ヤンゴン空港到着

ホテル到着 遺骨ホテル安置

遺骨再整理

3月11日 団長(2班) ホテル到着

1000 0810 遺骨安置室へ遺骨に拝礼

1400 1100 ヤンゴン宗教・文科省へ結果報告

1000 0810 税関検査(遺骨持出許可証受領)

3月12日 在ミャンマー日本大使館結果報告

1400 遺骨安置室 拝礼へ遺骨を車両へ

1000 0810 合同追悼式(ビルマ記念碑前)



合同追悼式後の記念撮影 (ビルマ記念碑前)

1330 税関検査(大使館で)

2210 団装備品等の撤収作業

3月13日 ヤンゴン空港出発

0620 成田空港着

0930 KKRホテル東京 仮安置室捧持

1940 ビスマーク・ソロモン諸島戦没

0930 者遺骨収集団出迎え

3月14日 仮安置室 引渡式予行等

0930 遺骨捧持・千鳥ヶ淵戦没者墓苑

(式場)へ移動

1030 帰還に伴う遺骨引渡式

1050 解団式

1 四 派遣団参加所感

ミャンマーは日本の約1.8倍の広大な領土を有し、私が見聞きしたのはその一部、ミャンマー最大の都市ヤンゴン、首都ネピドー、シャン州ペコン地区及びブラバロオ村とその経路ですが、新興国が貧しさから脱却するため道路をはじめとする社会インフラを猛烈な勢いで整備している様子を垣間見ること

ができました。また、子供達の澄んだ目、黙々と働く住民を目の当たりにし、この国の発展を祈らずにはいられませんでした。



現地追悼行事後の模様(上:お菓子のプレゼント 下:ブラバロオ村住民と記念撮影)

2 英霊への敬意と尊崇

ブラバロオ村は標高1500メートル近い高原地帯にあり、河川がなく、井戸水も確保できないため、住民は現在でも雨水を生活水にしています。当時の日本軍はこのような場所にも

長期にわたり部隊を展開し、住民と良好な関係を構築・維持し、隊員は村人の家で居住していたそうです。今でも日本人に対し好意的で、我々の遺骨収集活動に積極的に協力してくれました。これはこの地で英霊となられた皆様のご功績の賜であり、改めて敬意と尊崇の念を抱いた次第です。

3 遺骨収集活動の実態

今回の遺骨収集活動を通じて遺骨を海外で収容することが如何に大変か実感することができました。国家間の調整、現地情報収集活動、埋葬地地権者からの発掘作業許可取得、遺骨の日本奉還許可手続等枚挙にいとまがありません。就中遺骨鑑定はその適否が遺骨収集活動そのものに及ぼす影響が大きく極めて重要です。

このような中、本年3月21日日本戦没者遺骨収集推進協会の遺骨鑑定専門員檜崎修一郎博士がテナン島での任務中に急逝されたことが悔やまれます。檜崎先生は本年1月からブラバロオ村で人骨と獣骨を分別、更に31名の遺骨からミャンマー人の遺骨2体を分別され、今回我々が日本人遺骨29体を奉



現地追悼行事会場まで住民先導でパレード(最後尾右は小銃を持った少数民族の民兵)

選できた最大の功労者です。
謹んで榎崎先生のご冥福をお祈り申し上げますとともに、遺骨収容活動が国家の事業として一層充実することを祈念しています。

事務局からの報告

一 令和元年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊」の催行

(一) 慰霊式典及び直会
7月6日(土)、靖國神社において、当協議会が参加団体と共に挙行した令和元年度「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」は、多くの会員の皆様のご支援、ご協力を得て無事終了することができました。大勢の皆様のご参列に心から感謝申し上げます。

また、今回も昨年同様全国津々浦々の皆様から、在宅参拜のご意向に添えて、玉串料及びご寄付をお届けいただき、戦没者慰霊に寄せる皆様のお心を強く感じました。ご芳志誠にありがとうございました。

式典には、共催団体代表として森勉 偕行社理事長、片岡晴彦つばさ会会長、寺島泰二英霊にこたえる会会長、堀江正夫東部ニューギニア戦友・遺族会会

長はじめ多くの方に、来賓として館本勲武デリカフーズホールディングス(株)会長、緒方威・繁代様(故瀬島龍三氏ご家族)等にご参加いただき、盛会裡に実施することができました。

自衛隊からは、統合・陸・海・空各幕僚長代理にもご参列いただきました。また、今年も奉納演奏で世田谷男声カルテット「ガバーガバ」の皆様と、トランペット奏者の堀田和夫・牟田春雄様に、ご奉仕・ご協力いただきました。また、参議院議員の山谷えり子、宇都隆史、佐藤正久、水落敏栄(日本遺族会会長)様からは慰霊電・メッセージを賜りました。

直会には、来賓として村田信昌靖國神社権宮司にも参加いただき、靖國會館2階九段・玉垣・田安の間において終始和やかな雰囲気の中、戦没者に思いを馳せながら寛いでいただきました。式典参列者は159名、直会参加者は103名、在宅参拜者は66名と、ほぼ例年同様多くの方のご参加をいただきました。

なお、令和2年度の大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭は、令和2年7月4日(土)に行う予定です。多くの皆様のご参加をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

(二) 主催団体

- ・ 公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会 (以下五十音順)
- ・ 公益財団法人 海原会
- ・ 英霊の志を継承する会
- ・ 英霊にこたえる会
- ・ エラブカ東京都人会
- ・ 公益財団法人 偕行社
- ・ 鹿児島偕行会
- ・ 神奈川県偕行会
- ・ 旧戦友連
- ・ 熊本偕行会
- ・ 熊本歩兵第225聯隊戦友会(永代会員)
- ・ 群馬偕行会
- ・ 国民保護協力会
- ・ 埼玉偕行会
- ・ 佐賀県偕行会
- ・ NPO法人 JYMA日本青年遺骨収集団
- ・ 震洋会(永代会員)
- ・ 公益財団法人 水交会
- ・ 全国海洋戦没者伊良湖岬慰霊碑奉賛会(永代会員)
- ・ 全国近歩一会(永代会員)
- ・ 全国甲飛会(永代会員)
- ・ 全国ソロモン会
- ・ 全国メレヨン会
- ・ 一般社団法人 全ビルマ会
- ・ ソ連抑留戦友遺族会東京ヤゴダ会(永代会員)
- ・ 公益財団法人 太平洋戦争戦没者慰霊協会
- ・ 公益社団法人 隊友会
- ・ 筑後地区偕行会
- ・ 公益財団法人 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会
- ・ 航空自衛隊退職者団体 つばさ会
- ・ 一般社団法人 東京郷友連盟
- ・ 東部ニューギニア戦友・遺族会
- ・ 特攻殉国の碑保存会(永代会員)
- ・ 公益財団法人 特攻隊戦没者慰霊顕彰会
- ・ 豊橋歩兵第18聯隊戦友会(永代会員)
- ・ 一般社団法人 日本郷友連盟
- ・ ネービー21
- ・ ハワイ明治会
- ・ 姫路偕行会
- ・ 福井県偕行会
- ・ 福岡県偕行会
- ・ 宮崎県偕行会
- ・ 山口県偕行会
- ・ 陸士第53期生会(永代会員)
- ・ 陸士第57期同期生会(永代会員)

二 業務・会計監査の実施

4月25日事務局において、平成30年度業務・会計監査を受けました。

監査の結果、事業は適正に行われており、経理についても異常は認められませんでした。

監査人

- ・阿部 軍喜（公認会計士）
- ・藤原 博

三 令和元年度第1回通常理事会及び定時評議員会の開催

(一) 通常理事会

5月8日（水）、当協議会事務所に於いて本年度第1回通常理事会を開催しました。

本会議では、事務局から提出された議案について熱心な討議が行われた結果、事務局案はそれぞれ原案どおり承認されました。

議案

- ①平成30年度事業報告
- ②平成30年度決算報告
- ③役員等の選任等
- ④代表理事の選定
- ⑤令和元年度定時評議員会の開催

出席者

理事12名中11名及び監事2名が参加

(二) 定時評議員会

5月29日（水）、当協議会事務所に於いて令和元年度定時評議員会を開催しました。

本会議では、事務局から提出された議案について熱心な討議が行われた結

果、事務局案がそれぞれ原案通り承認されました。

議案

- ①平成30年度事業報告
 - ②平成30年度決算報告
 - ③平成31年度事業計画及び収支予算書
 - ④役員を選任
 - ⑤評議員の選任
- 出席者
評議員11名中7名が参加

四 慰霊諸団体連絡会議の開催

6月4日（火）、靖国会館において慰霊諸団体連絡会議を開催し、情報交換を実施しました。

議案

- ①遺骨収集事業の現況等（講話）
講師：日本戦没者遺骨収集推進協会 専務理事 竹之下和雄氏
- ②遺骨収集に関する意見交換
- ③令和元年度合同慰霊祭について

五 硫黄島戦没者遺骨収集派遣参加

今年度第1回派遣（7月23日～8月7日）に、借行社から2名が参加され

ます。

第2回派遣（9月24日～10月9日）は、水交会から2名の参加を予定しています。

六 慰霊祭等への参加

①4月7日（日）、靖国神社において第8回軍馬・軍犬・軍鳩合同慰霊祭が行われ、柚木理事長が参加しました。

②4月22日（月）、比叡山において第3回大東亜戦争戦没者慰霊法要が行われ、柚木理事長が参加しました。

③5月27日（月）、千鳥ヶ淵墓苑で行われた拜礼式に伊藤専務理事以下2名が参加しました。

④6月2日（日）、陸上自衛隊武器学校において第52回予科練戦没者慰霊祭が行われ、柚木前理事長が参加しました。

賛助会員

阿久澤英紀 安藤 隆太 飯盛 進
石田 裕 井本 徹 植田 和昭
岡部 俊哉 甲斐 正人 川又 弘道
菊池 哲也 菊地 珠未 黒木 伸男
呉 正男 古賀 英松 齋須 将
佐瀬 正博 沢田 進 島 武光
菅沼ひかる 鈴木 克之 竹俣 壽子
豊田 秀雄 中谷 恵子 中西 倉三

新入会員紹介（敬称略）

(R元・3・15・30・6・30)

残暑お見舞い

申し上げます

公益財団法人 借行社

- 会長 志摩 篤
- 相談役 富澤 暉
- 理事長 森 勉
- 副理事長 深山 明敏
- 副理事長 熊谷 猛
- 副理事長 白石 一郎
- 専務理事 奥村 快也
- 事務局長 山越 孝雄

公益財団法人 水交会

- 会長 齋藤 隆
- 副会長 吉川 榮治
- 理事長 赤星 慶治
- 専務理事 杉本 正彦
- 事務局長 長谷川 洋

公益財団法人

特攻隊戦没者慰霊顕彰会

- 会長 杉山 蕃
- 理事長 藤田 幸生
- 副理事長 岩崎 茂
- 専務理事・事務局長 石井 光政

根本博之 東元良樞 廣島昭三
堀切光彦 増田潤一 吉田康浩
若生明智 和田信之

(以上合計32名)

令和元年度合同慰霊祭
参拝者及び寄付者名簿

相田 勲 青木 和子 青木 伸晃
赤木 智歩 秋上 眞一 飯田 哲也
池上 均 池田 康博 石井 光政
石川 不二夫 石津 歩登 石塚 厚史
板垣 裕 一戸 弥生 伊藤 隆
糸田 京子 井上 恵子 井上 達昭
井上 敏明 入谷 進 岩田 司朗
岩元 光男 植木 美知男 上田 敦子
梅木 一美 圓藤 春喜 及川 昌彦
大澤 正幸 大塚 博通 大穂 孝子
大松 澤勝子 岡田 もみじ 緒方 威
緒方 繁代 奥本 康大 越智 通隆
折笠 亜美 織田 邦男 角館 満弘
掛水 敬太 片岡 晴彦 金岡 弘大
金子 敬志 柄沢 健史 荻谷 政太郎
河野 美好 菊地 正一 菊池 正通
北村 奈緒香 桐生 貴央 國澤 輝生
窪田 清之 熊谷 猛 吳 正男
古賀 英松 小島 啓三 後藤 由美子
小長谷 文晴 小林 武一 小林 みずき
斎藤 文彦 佐久 田昌昭 佐古 壽聰
笹 幸恵 佐瀬 正博 佐藤 慎二
佐藤 泰夫 志賀 政雄 嶋野 隆夫

島村 宜伸 清水 悟 神保 明生
菅沼 ひかる 杉澤 敬子 杉澤 英雄
杉本 正彦 鈴木 光夫 清野 多佳子
瀬尾 広大 田井 宏幸 高崎 啓一郎
高橋 義洋 竹内 稔 竹下 泰義
武田 正徳 武田 功 竹本 佳徳
館本 勲武 建山 洋子 田内 浩
千明 八十次 つちや かおり 鶴田 俊秀
寺島 泰二 富樫 利男 内藤 壽美子
内藤 壽美子 中井 真人 中川 法宏
中川 玲奈 長峯 精一郎 中村 臺造
中村 剛 行方 滋子 西原 千鶴
西原 千江 西原 裕則 二瓶 恵子
丹羽 真清 野口 健 橋本 孝一
幡野 明世 原田 太郎 平野 醇
平林 武志 弘中 八重子 福井 正明
福田 正彦 福山 義人 藤田 幸生
藤沼 則夫 古沢 清宏 堀江 正夫
堀田 和夫 正本 禎亮 松川 茉莉奈
松田 康希 松原 きよみ 松本 幹
松元 光恵 間中 悠太 三宅 孝
牟田 春雄 本原 和哉 森 勉
柳沼 宏美 柳澤 壽昭 山口 美朝
山越 孝雄 山崎 文夫 山下 桂子
山下 輝男 山田 聡 山根 明子
山本 康正 山本 仁 山本 洋
柚木 文夫 吉岡 知佐 吉川 洋利
吉村 仁志 若木 利博 若松 重英
涌井 慎一 渡邊 秀光

(世田谷男声カルテット
ガバーガバ4名)

(以上合計159名)

令和元年度合同慰霊祭
在宅参拝者及び寄付者名簿

阿部 敏行 荒木 精之介 安藤 裕
安藤 義雄 井瀉 昭一 石井 和子
石塚 健一 石橋 聡 市来 徹夫
井本 尚宏 上田 全喜 内田 十九
浦浪 臣晃 海老原 富美枝
大穂 園井 荻原 健一 小田 原健児
小沼 愛 狩野 隆平 川田 久四郎
衣笠 陽雄 工藤 重民 小林 博行
齋須 重一 齋須 将 澤田 壽朗
清水 典郎 新郷 勝亮 菅原 春生
杉原 清之 関 慎 高橋 芳幸
武田 健策 多田野 弘 田中 正和
玉川 博己 田村 祐茂 土井 義尚
百目 木清 富田 稔 永井 勝一
中村 貞三 西嶋 正幹 野本 純
橋本 光彦 橋本 亀 島間 成允
花村 龍男 早瀬 登 早田 亮彦
東田 政尋 日高 誠 日高 靖輝
弘瀬 好子 布施 木昭 星野 登志子
真方 侃 三浦 誠哉 三輪 長正
八木 啓太 安光 久夫 山口 淨秀

公益社団法人 隊友会

会長 藤縄 祐爾
理事長 折木 良一
常務理事 増田 好平
常務理事 吉川 榮治
常務理事 片岡 晴彦
常務執行役 田中 敏明
事務局長 植木 美知男

航空自衛隊退職者団体

つばさ会

会長 片岡 晴彦
副会長 片山 隆仁
副会長 溝口 博伸
副会長 戸田 眞一郎
副会長 齊藤 治和
副会長 藤田 信之
専務理事 若林 秀男

一般社団法人 日本郷友連盟

会長 寺島 泰三
副会長 森 勉
専務理事 越智 通隆
常務理事・事務局長 富田 稔
理事 中村 弘

山田 健雄 吉岡 信夫 吉田 三郎
若月 良介
(以上合計66名)

**寄付金の税額控除に係る
領収書等の送付について**

当協議会は、租税特別措置法に基づき税額控除対象法人に認定されており、5000円以上の年会費・

寄附金を頂いている方に領収書及び証明書(写し)を送付しておりますが、本年度も同様の処置をさせていただきます。なお、本送付は、12月中の発送を予定しておりますので、ご了承ください。

また、5000円未満の方でも、確定申告にあたりこの領収書及び証明書(写し)をご希望の方は、ご遠慮なく電話・メール等で事務局までお申し出下さい。

機関紙「慰霊」の合版号発刊

機関紙「慰霊」は、例年、4月、7月、10月、1月に発刊しておりますが、諸般の事情から、本年度も7月号、10月号の合版号として9月発刊と致しました。ご了承くださいませようお願い致します。

「寄稿のお願い

当協議会は、広報誌「慰霊」を、年3回(1月、4月、9月に)発行しています。各団体及び会員の皆様の積極的な寄稿をお願い申し上げます。原稿は、手書き、ワープロ、パソコン作成のいずれでも結構です。関連の写真等がありましたら努めて添付をお願いいたします。

会費納入のお願い

当協議会の活動は、会員の皆様の会費・寄付金等の浄財で成り立っております。令和元年度(平成31年度)の年会費未納の方には、「慰霊」47号に払込取扱票を同封しておりますので、会費納入にご協力をお願いします。

当協議会会員ご入会のご案内

当協議会は、民間有志の会員の皆様からお寄せいただく貴重な会費収入を頼りに、戦没者慰霊の事業を運営しております。

この国の大東亜戦争戦没者慰霊事業の永続と充実を希う多くの皆様の、当協議会会員ご加入を心からお待ち申し上げます。

既加入会員の皆様には、お知り合いの方の新規入会勧誘に、格別のご協力を賜りますようお願い申し上げます。会員の区分と年会費は次の通りです。

- 一 賛助会員
(本会の趣旨に賛同する個人)
年会費 三〇〇〇円
 - 二 賛助特別会員
(特別御芳志の賛助会員)
年会費 五〇〇〇円
 - 三 正会員
(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)
年会費 一〇〇〇〇円
 - 四 特別会員
(本会の趣旨に賛同する法人・団体)
年会費(一口) 一〇〇〇〇円
(一口以上)
- *振込先口座番号(郵便振替口座)
〇〇一四〇一六一三三四九三〇

**残暑お見舞い
申し上げます**

公益材団法人

大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会

- 会長 島村 宜伸
- 理事長 山下 輝男
- 専務理事 伊藤 隆
- 事務局長 國澤 輝生

株式会社 SNA

株式会社 キャリア

コンサルティング

軍学堂

医療法人社団 伍光会

株式会社 再生日本21

株式会社 青林堂

特定非営利法人 孫子経営塾

同台経済懇話会

株式会社 リエイト